

Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.101

試 行 錯 誤



ラオスチームのミーティング(ビエンチャンにて)

撮影 田村 仁

特集 人と組織とネットワーク

人と組織とネットワーク	3
環境プロジェクトで結ぶ	6
インタビュー JOCS	8
地域の中に世界がある	10
お前ら何しに来てるんだ!? 座談会	12
日本の開発教育(3)	16

まえがき

JVCができて10年がたった。

その間、アジアやアフリカそれぞれ独自の活動を、東京事務所の国別担当が支える形で、組織を運営してきた。

現場のスタッフは、地域に密着して、人々と寝食を共にしながら、彼らの抱えた問題の解決を図ろうと頑張ってきた。

現実の問題に直面し、みつめていけば、JVCが関わってきた国の問題は、その国だけではなく、隣国や大国との関係、そして日本との関係、その延長線上にある私たちの生活と深く関わっていることがわかってくる。

今までのJVCの活動を、織物に例えるなら、縦糸的につないできたということが出来る。

その縦糸に乗って数多くの人が、JVCに参加し、アジアやアフリカの人に会い、人生を豊かにしてきた。

そういう人たちがたくさん生まれながら、JVCという組織も変わってきた。現場と日本を個別につなぐ縦糸だけでは、今、私たちの足元をすくいかねない環境問題や世界の人口の半分を占める女性問題、人権問題には対応できない。

国を越えた問題を結んでゆく横糸がなければ、世界とつなげなくなりつつある。マレーシアのサラワクでおきている熱帯林伐採問題では、熱帯林伐採によって、森の住民の生活が破壊されつつある。

そして、切られた木は私たちの暮らしのなかで、家具や紙になっている。マレーシアの熱帯林がなくなれば、また違う国のどこかで同じことがおきるだろう。

JVCに関わる一人一人も、現場と日本を結ぶだけの縦糸から、国と国が乗り入れて、ボーダーレスになってきている横糸的な現状を的確につかんで織り込んでいくことが、一人一人の国際的視野を広め、問題をキャッチし対応する力を高めることになる。

一人一人が力をつけてゆくということは、プロジェクトの内容が豊かになり、組織の魅力も増してくることにつながるだろう。

組織の問題を意識して取り上げたことはなかったが、ここでJVCがどんなふうになら変わってきているのか、自己確認も含めて取り上げてみた。

柴田 くす子

特集 人と組織とネットワーク

JVCは、基本方針にあるように、一人一人の意志の集合体である。簡単に言えば、誰かに命令されて活動をしている訳ではなく、自分がやりたいから、やっているということになる。しかし、それではJVCの活動は独善に陥ってしまう。活動が社会性を帯び、一人でも多くの人に支持してもらうことが、息の長い活動になるかどうかを左右する。

個人の支持と同時に、個人の力では及ばない問題に対して、組織の有効性もでてくる。JVCにおいて、組織とは何だろうか、またこの組織を強化するとはどんな意味があり、それを具体的に実現するために何をすればよいのだろうか。この問題提起に対し、星野、林、谷山、鶴田、前川、柴田久史、柴田久寿子らが話し合いをもった。その結果、プロジェクトの内容を豊かにしていくことや人材育成が、組織強化につながるということが確認された。それでは、内容を豊かにするというのはどういうことか。

最近のラオスやエチオピアなどの各プロジェクトの取り組みを見ながら、以前のJVCのプロジェクトと何が変わってきているのかを検証し、それが組織強化とどう関係しているのか探してみたい。

1) ラオスプロジェクト

まず、ラオスプロジェクトは活動資金の調達という面で新しい動きが起こった。日本社会においては緊急プログラムに対してはお金が集まりやすいが、開発プログラムに対しては集まりにくいという事情があった。JVCは当初、緊急救援団体としての色合いを濃くすることによって日本社会から資金集めをしてきた。また、今までの国際機関との連携も主にUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)とWFP(世界食糧計画)など難民や食糧援助など緊急事態に対処するところだけから資金や物資を供与してもらっていた。

ところが、ラオスプロジェクトは、生活改善普及員養成センターを建設して生活改善普及員の養成という開発プログラムを手懸け、同時にJVCとしては初めてUNDP(国連開発計画)やUNIFEM(国連女

性のための開発基金)という開発や女性問題に取り組む国際機関から助成金を受けた。

これはJVCにとっては、新しいチャンネルであり、国連機関との多面的な連携ができてきたことになる。

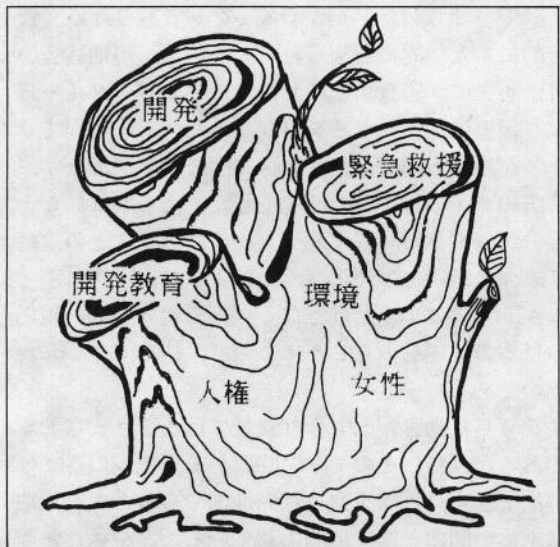
また活動資金集めの難しさから、プロジェクトの支援者を地方にも求めた。それは既存のJVCの支援者をJVC内部で食いつまないためである。

その結果、新潟という地方の一地域の人たちの中から、ラオスを支援するという活動が起こった。

この活動は、NVC(新潟国際ボランティアセンター)となって組織された。JVCは、資金集めの必要から地方に出ていったのだが、結果として、新潟の人たちが第三世界に協力しようという独自の活動の火つけ役になれたと同時に、日本の地域とラオスという第三世界の地域を結ぶパイプの役を果たすことができたのである。

彼らは独自の運動を進めながら、JVCのラオスプロジェクトへの資金協力をしたり、現地視察をして相互に連携し合う関係が生まれた。

この連帯は第三世界と日本をつなぐものであるが、さらに特筆されることは、第三世界と第三世界をつなぐという形が生まれたことだ。ラオス人のスタ





研修を受けるラオス人スタッフ

ップ（生活改善普及員養成センターの講師）が、これからラオスでどんな農業をやっていくのかイメージするために、自給自足できる複合農業経営を基盤にした村作りに取り組んでいるタイのプーヤイパーイ（パーイ村長の意）の村を視察した。機械や化学肥料を使った近代的農法を考えていた彼らにとって、プーヤイパーイのやり方は大変参考になったと思う。またタイにあるATA（適性技術協会）のスタッフを講師として招いて、普及員の指導にあたってもらったことも、タイ・ラオスの地域交流の一環であった。

JVCラオスは新しいプロジェクトであるため、資金的にも人材的にも限られていたので、現地代表の谷山が主に、資金集めのために、ラオスータイー日本を頻繁に往復せざるを得なかった。その過程でラオスが抱える問題は、ラオス一国では解決できず、隣国のタイや日本との関連でしか捉えられないことが分かってきた。既に述べたラオスとタイとの連携、ラオスと新潟との連携は、このように、担当スタッフが、自分の現場だけでなく、第三世界の他の現場や日本の地域を歩くことによって、初めてつくられたのである。

こうした動きが出てきた背景にはさまざまな要素があるが、特にその一国の問題がその地域のみでは解決できず、日本を含めた先進国やもっと大きく地球全体の問題と密接に関係していることを私たちが

自覚し始めたことに基づいている。

従来のプロジェクトのように代表が現地に長期滞在することの長所は、その国の現実をよりよく知り、現地での人間関係が豊かになり、プログラムの内容も深めることができることにある。問題点としては、視野が狭くなって近視眼的に現実をとらえてしまう傾向があることだ。日本と現地を往復する長所は、その地域の問題を地域のみ留めず、より構造的に広く国境を越えてとらえることができやすいことにある。短所は、その国の事情を深く知ることができず、人間関係も希薄になるということだ。どちらのタイプでも、状況に応じて対処すればよい。JVCは、やはり現地に深く関わり、人間関係を豊かにしながら、その地域の人たちとともに活動することをもっとも大切な要素としてきた。今回、ラオスチームの場合も現地駐在のスタッフに前田さんを派遣できたことが大きな力となった。彼女は、協力隊の隊員として2年間ラオスに住んだ経験があり、ラオス語が堪能で人格的にもラオス社会にすぐ溶け込めるという人だった。

2) カンボジアプロジェクト

今年4月、カンボジア国内で活動する4つのNGO（フランス2団体、アメリカ1団体、JVC）が、カンボジア問題の恒久的解決に向けて、それぞれの国で一斉に「カンボジア人のための緊急声明」の共同記者会見を行なった。何分、慣れないことで、社会的な反応はいまひとつであったが、組織的には全く新しい試みであった。この動きの特徴は、西側諸国とは国交のないプノンペン政府の中で活動して現地事情に詳しい民間団体が、自国政府に対して市民の立場からカンボジア問題について発言していくことで、問題解決の一端を荷なっていくという意図で行なわれた。

また、3年前に『NGOのみたカンブチア』というタイトルの本を出版したが、これもカンボジア国内で働くNGOがその本質的解決のために共同声明を行ない、自国政府にアピールしようとしたものだ。

このように、国境を越えて市民団体が相互に連帯して政府や自分たちの社会に向けて積極的に発言していくことは、JVCも含めて、今後ますます盛んになっていく。



共同記者会見

3) エチオピアプロジェクト

エチオピアでは、干ばつ飢饉に対する救援活動も、飢えからの復興活動も、その主要な部分が NGO によって行なわれている。内戦状態で政府間援助を行なっても、援助物資がどのように使われているか確認することができないからである。海外、およびエチオピア国内の NGO 約 60 団体は、協議体を形成している。

世界各国の市民団体からの寄付金はもちろん、各国政府からの物資や資金もこうした協議体を通して集められ、各 NGO によって有効に使われる。

JVC は 1985 年以来、協議体のメンバーであり、ヨーロッパやカナダから、食糧、農具、薬品など調達してきた。同時に、日本政府にも NGO を介しての援助を勧めてきたが、今回の緊急援助では、若干それが実り、国連機関を通して、NGO のグループに食糧と輸送費が送られるようになった。

また NGO のグループは、政府、反政府勢力の双方と話し合い、救援活動のための部分的停戦を勝ち取ってきた。戦争を行なう両勢力の間の調停力となることが、NGO の次の課題である。

4) 熱帯林行動ネットワークなど他団体との連携

熱帯林の伐採に反対する NGO、熱帯林行動ネットワーク/地球の友と共に、マレーシアのサラワク州の森林伐採に反対する運動を進めようとしている。これには、東京事務所で新たに環境担当となった岩崎美佐子を中心となって当たっている。

彼女は、既存の縦割りのエチオピア、ラオス、タイなどの地域担当からはずれ、環境というひとつのテーマによる横つなぎの担当になった。これは、まさに環境問題が一国の国内問題として解決できず、国境を越え、地域を越えた地球レベルでの国際連帯が必要だという認識の下に組織的に合意を得ることができたからである。彼女の仕事は、多面的なネットワークをつくり、さらに日本社会に対し発言していくことにある。

以上の各々のプロジェクトの動きを検証することによって、新しい局面を見出すことができた。

そのひとつはさまざまなネットワークの形成である。日本の地域と第三世界の地域の交流、国境を越えた第三世界と第三世界の交流、各国の NGO との連帯行動である。その中で JVC は、国境を越えて複数の地域をつなぐパイプの役割を演じ、また、行動の主体として積極的に社会に対し発言していこうとしている。そうしたネットワークをさらに豊かにしていくために、国境を越え、地域を越えて活動をする環境担当ができた。

JVC における組織強化の意味は、従来の縦の動きに対して、横の動きを活発にしていこうネットワーク作りを積極的にすすめることにある。これは第三世界に共通する問題に対し、地域の人々の問題解決の意欲と方法を結集し、連帯の輪をつくることによって、問題解決を図るとともに、その問題を取り巻く社会構造そのものに働きかけて状況を改善していこうとすることである。

(文責：編集部)

環境プロジェクトで結ぶ

岩崎美佐子

なぜ環境問題か

たくさんの生物が共同して作り上げた地球上で人間だけが突起し、他の動植物を絶滅に追いやり、そのことによって人もまた滅びる道を歩いていることが危惧されるようになって久しい。それでいて、環境破壊へのブレーキはなかなかかからない。

フロン対策など、経済先進国において技術で解決を図ろうとしているものは別として、森林伐採、採掘、伐採跡地での換金作物の広域単一栽培、大規模ダム建設など、とくに第三世界における自然環境破壊はむしろ激しさを増している。このような現象を作り出している背後には、日本など経済先進国の大量消費、ブルドーザーなどの破壊機械の大量生産とパワーアップ、利息の運用が必然となる金融機関主導型の経済システムなどがある。したがって、第三世界における環境破壊の要因の多くは経済先進国の側の問題であるとみるべきであろう。

他の動植物が減びても、最後まで生き延びることを信じている人間に、滅亡の危機は全員同じ確率ではやってこない。皮肉なことに破壊推進の張本人である、経済先進国の都市に住む人たちより、たくさんの動植物と共存し、森林や水など環境を守っていた人たちから滅びていく。サラワクでは、このまま伐採が続けば熱帯林は10年ももたないであろう。森

の民、プナン人の飢えはすではじまっている。

JVCの取り組み

JVCのような小さな民間団体が、単独で環境問題に対してできることはあまりにも小さい。しかし、日本の他の団体や個人と手をつなぎ、世界の団体や個人とも手をつなげば可能性が広がる。ひとにぎりの人たちの目先の利益のために、死と向かい合わざるを得なくなった人がいることを広く知らせ、行動を喚起したい。

(1) 海外で

今年から、JVCでは環境問題に積極的に取り組んでいく。海外においては、国を越えた農民の交流、農業や環境問題に関する農民国際会議など、草の根レベルでの経験の交換を盛んにし、ネットワークを作っていく。

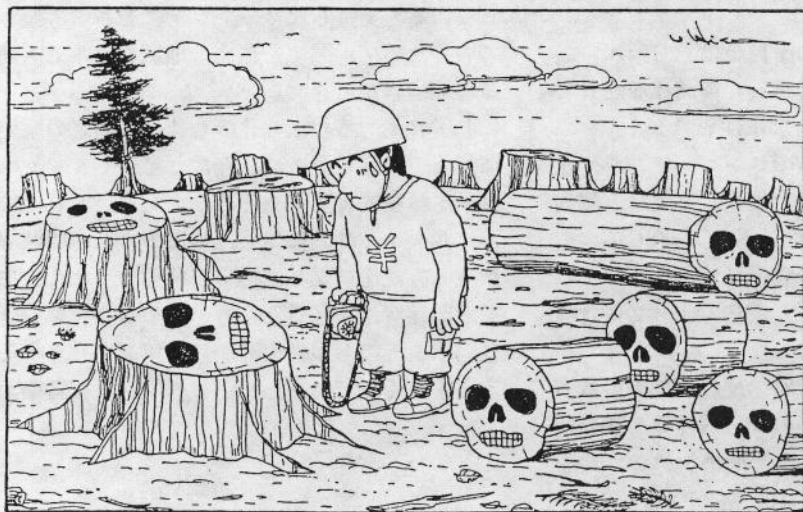
また、「メコン川ダム建設計画」など、有償援助や借款で可能となる巨大環境破壊プロジェクトに関する情報を収集、関係地域の人たちに正しい情報を流すとともに、誰がどう得をするのかしっかり検証していきたい。かつて水害に悩まされた日本人は、ダム建設はいいことと信じている。しかし、世界の巨大ダムの失敗例は枚挙にいとまがない。

ダム建設は上流の人たちを立ち退かせ、森林を湖底に沈めて、下流の人たちの農業を変える。マラリア、住血吸虫などが増加し、貯水池で脱酸素化した水は下流の漁業を破壊する。都市や工場にのみ電気や水が供給され、

熱帯雨林の訴え

ヒサ クニヒコ

東京新聞 '89.9/24



流域の人たちがほとんど恩恵をこうむらないダムさえある。さらに不可解なのは、ダム建設国が借款で賄う建設費用の返済年数と、ダムの耐用年数に差がないことだ。借金を払い終わったときは使用不能になっているダム、いったい誰のためのダムなのであろうか。

実際のプロジェクトとして、東南アジア大陸部でのアグロフォレストリーを考えている。とくに森林破壊の激しいタイでは、木のない山が延々と続いているところが目立ち、植林してあるところはチークなど単一種が一般的だ。50年サイクルのチークよりもっと早く換金できる木として、ユーカリ植林も増えている。これらの森は商業林だ。地域の人々が共有してきた、生活に有用な樹木の混在する森林とは違う。利用できないということは、人々にとって意味がないということであり、意味が見いだせなければ保全の関心も薄い。かえって無断伐採も増える。果樹、薬樹、薪炭材、建材、工芸用樹木、食用植物など、生活に必要な木を混植することで、人々と森が共存することはできないか。このような森のかたちは、タイ中南部の果樹園で伝統的に見られたもので、小さいものならタイ東北部やインドネシアでも屋敷林として見られる。これを山岳地帯に拡大してみたい。最初のプロジェクト地として、タイ北部を考えている。

(2) 日本と海外を結ぶ

海外と日本との関係では、各国の環境 NGO と情報交換をはかりたい。とくに、タイの「エコロジー回復プロジェクト」とマレーシアの「地球の友マレーシア」と連携を強めたい。また、少しでも多くの日本人に現状を知ってもらうため、スタディーツアーなどを考えている。

(3) 国内で

国内においては、「熱帯林行動ネットワーク」や「地球の友日本」などと連携をとりながら、各地にネットワークを作り、地方自治体へ、熱帯材（コンクリートパネルや内装材としての合板など）を使わない運動や、ゴミを減らす運動などを働きかけるなど、近場のものを大切に利用する生活を定着させていきたい。誰でも始められる活動のマニュアル作りや、勉強会なども開催したい。

世界熱帯林運動会議に参加して

1990年5月24日から26日まで、マレーシアのペナンで「第二回世界熱帯林運動（以下WRM）会議」が開かれ参加した。会議の目的は、これに先だってインドネシアで開催された ITTO（International Timber Trade Organization）の決議を踏まえて、WRMがどう行動するか、その方向をさぐるものである。14カ国から約50人が参加した。合宿して、連日朝9時から夜10時半まで討議するという白熱ぶりで、時間切れとなった2つの議題については、27日の日曜日の午後まで討議が続いた。

まず、熱帯材産出国から伐採状況、反対行動、裁判、ダム計画などについての現場報告があり、熱帯材消費国からはキャンペーンなど、それぞれの取り組みについて報告があった。

次に、伐採・木材取引をする企業、林業関係の国際機関（ITTO、FAO〈Food and Agriculture Organization〉、TFAP〈Tropical Forestry Action Plan〉など）、各国政府援助、融資機関（世界銀行、アジア開発銀行など）への対応を討議し、続いてWRMの提案事項と具体的な行動計画を討議した。また、伐採によって森林が破壊され、生活の基盤をなくした人たちがどう生きていくのか、森林の再生は可能か、持続的な森林経営は可能か、プランテーション、商業植林などをどうとらえるかなどについても討議した。

討議の最大の焦点は熱帯林伐採の即時禁止に向けてなにができるかということであるが、3日間の討議を踏まえて、28項目の「今後の課題」を抽出し、それぞれが分担して埋めていく作業とした。

長い3日間（私は25日から参加）ではあったが、充実した3日間でもあった。サラワクの人たちとも、つっこんだ話ができた。ペナン消費者協会の人たちの受け入れもすばらしかった。とくに菜食の3食の食事とおやつのおいしかったこと、どんなにりっぱな討議をしても、それがだいなしになるような、輸入したエビなど食べるしかない日本の食事を心底貧しく思った。

（岩崎美佐子）

JOCS(日本キリスト教海外医療協力会)

一過性の救援ではなく、息の長い開発協力を第三世界で20~30年も続けてきた日本のNGOは、数えるほどである。そんな中で、「日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)」の存在は大きい。

欧米に比して歴史の浅い日本のNGOにとって、このJOCSの活動には多くの示唆が含まれていると思われ、その点を事務局の坂本氏と佐藤氏にお尋ねした。(インタビュー: 鶴田三芳)

——JOCSの設立経緯と現状の活動は？

坂本 日本の中国侵略で生まれた中国人難民に対して、戦前、クリスチャンの学生が京都を中心に医療活動を始めました。この活動に参加した人々が、1958年に香港で開かれた「東アジア・キリスト教者医療従事者会議」を契機に、JOCSを1960年に創設したのです。現在は、ネパール、バングラデシュ、カンボジア、インドネシアの4カ国に合計11名の日本人医療ワーカーを派遣しています。ワーカーの任期は最低3年。また、アジアの医療人を日本でトレーニングしたり、アジアの人々の医療・保健事情や生活、文化などについて日本の人々に知らせることも力を入れています。

——日本のNGOでは、会員数1000名が現実的な壁になっています。ところがJOCSは8000名以上もの会員がおられますね。どうしてですか？

坂本 いくつかの理由があります。現地派遣が決まった医療ワーカーは、自分の住む地域や友人・知人、教会などに働きかけ、自分を支援してくれるグループを自主的に組織してから、海外に赴きます。この支援グループを“プレイヤー・グループ”と呼んでいるんですが、現在、全国に13あります。各グループは独自の会員によって支えられていますが、同時に、その多くはJOCSの会員にもなっているので、新たなワーカーが入るごとにJOCSの会員も増えます。第二の理由は、地域活動です。プレイヤー・グループとは別に、関西を中心にいくつものグループがあります。京都JOCSとか、大阪JOCSとか、全部で7つあります。これらのグループが各種の地域活動を展開する中で、JOCSの会員になる方がいます。また、歴史をさかのぼると、ワーカー

ーとして海外で活躍してきた岩村昇さんの貢献があります。帰国のたびに岩村さんは、意欲的に全国をまんべんなく廻り、膨大な数の集会や報告会を行ったことで、会員が急増しました。

佐藤 もう一つ、古切手の収集運動があげられます。この運動には、クリスチャンに関係なく、年間でのべ100万人もの人が関わっていますから、会員になれる方も多いんです。

——これだけ会員がおられたら、会費収入が会の運営に大きく貢献してるんでしょうね？

坂本 ええ、会費や寄付でお世話になってます。

——私たちJVCでも、他のNGOの例に漏れず、収入の多くは事業費、つまり直接経費に指定されています。会の全体運営に使える収入は、会費も含めて、2割前後しかありません。常に資金的には楽じゃありません。JOCSは、その点いかがですか？

坂本 会の創設の当初から、プロジェクトの個別の経費に対して支援を募るのではなく、プロジェクト全体、会全体への支援をお願いしてきました。そこで大事なのが、JOCSや現地ワーカーと支援者との間の信用と信頼ですね。

——JVCでは、資金協力をお願いする場合、細かい予算書を提示し、「これこれに使います」と約束し、ほぼその通りに使います。

JOCSでは、そうしないんですか？

佐藤 事業費と管理費を分けて事業費のみをアピールするのではなく、全体への協力をよびかけております。

われわれが大事にしている方針がもう一つあります。「現地の人の依存心を助長しないために、活動地に物やお金は極力持ち込まない」というものです。

そうすると、支出に占める人件費の割合が大きくなりますが、開発協力の場合はそれでいいと思います。また、ことあるごとに、機関誌などを通じて、現地の医療ワーカーの生活状況を知らせ、生活保障の必要性をアピールしてきました。日本に住んでいる支援者の生活はだんだん豊かになりますよね。豊かさを享受している人が、海外の厳しい環境で働いている医療ワーカーに対して、貧しい生活をしないと云えますか？

———そうですね。また、給与や社会保険もさることながら、ワーカーの研修も充実していると聞きおよんでいます。

坂本 私たちは医療関係の研修の他に、語学、特に現地語の研修も重要視しています。コミュニケーションが大事ですから。3年の任期の内、初めの半年ほどは現地で語学トレーニングをまず行います。その間も、給与は通常通りです。必要があれば、イギリスやインドなどで熱帯病の研修もできます。

———帰国後、医療ワーカーはどうされますか？

坂本 3年の任期が終わり帰国した医療ワーカーで、その後も継続する場合は、次の派遣までの1年間、有給休暇があります。その内の3カ月は日本各地で講演します。単に現地の体験や状況を支援者などに知ってもらただけでなく、現地の医療ワーカーと支援者などが意識の上でも一体となるいい機会なんです。あとの9カ月は研修と休養です。

———進んでいるというか、何というか、すごいですよ、この日本のNGO界にあっては。

佐藤 JOCSは、欧米のミッシヨナリーのやり方を当初から参考にしてきました。ワーカーの待遇も含め、この組織的な整備ができたのは、設立後10年たった1971年、「第1回バンコク会議」の時でした。会の設立後ガムシャラに10年まづ頑張ったんですが、いろんな問題が出てきてましてね。それで、この会議を開いたんです。その後も、10年に1度の割合で1週間ほどの「バンコク会議」を開き、海外の医療ワーカーはもとより、日本からも事務局員や理事などが出席し、過去の10年の経験をもとに、その後の方

針を決めています。

———医療ワーカーと各プレイヤー・グループとJOCS事務局と、その三者の関係はどうなっているんですか？ 特にワーカーが海外に赴任してからは、どうなんですか？

決定とか、金の動きとか、情報の流れとか具体的にお聞きしたいんですが。

坂本 原則的には、現場ワーカーとプレイヤー・グループとの間の情報やお金の流れなどは、すべてJOCS事務局を通ります。重要な判断はJOCSの理事会が行います。

佐藤 生活費とか最低の活動費はJOCS事務局から送られますが、ワーカーの家族を現地訪問させたいとか、ワーカーが使う車を贈りたいとか、そのような場合は、事務局は間に入らず、プレイヤー・グループとワーカーとの間で直にそれを進めます。また、情報の流れは基本的にここ事務局を経由していきます。会報は、JOCS事務局だけでなく、各プレイヤー・グループも発行しています。業務上の打ち合わせや連絡に関しては、プレイヤー・グループは関与しません。

———最後に、会の運営上で見逃せない重要なことを付け加えていただけますか？

佐藤 3年に1度、「ワーカー会議」をわれわれは開いています。時間がたつと、各ワーカー間、ワーカーと事務局と支援者との三者間でギャップが広がっていきます。それを埋めるために、各国のワーカーが一カ所に集まります。この会議の結果は理事会に提言や要望を含めて報告されます。



地域が元気になる 豊かなネットワーク作り

「地域の中に世界がある」

6月10日フリートーク 於：東京都婦人情報センター

最近、地方で、アジアやアフリカの事について興味を持ち、何か自分でできないかと独自の活動を展開する人が増えている。何か新しいことを始める時は、周囲の無理解、非協力、中傷にさらされるためにせっかくの芽が摘まれることが多い。そんな中で、孤軍奮闘しながら仲間を増やし、5年も6年も粘り強い活動を続けている地方の会員に話をしてもらった。地縁、血縁、社縁が時には居心地良く、時には重いしがらみになる中で生活をしながら、頑張っている姿は、フリートークに参加した人全員を元気づけてくれた。地域が元気になってくる、人が元気になってくるのが、豊かな関係を作りあげていくことになる。



たかこ
土居陸子さん(愛媛県)

5月20日、東京でのチャリティウォークと同じ日に、松山でもチャリティウォークをやりました。

最初、全く一人だったので、環境フォーラムで知り合った人に強引に呼びかけて仲間を募り、何とか4人集めてスタートしました。

今回のイベントで協賛もとうとうと生協に呼びかけましたが、ダメ。県内の国際交流関係団体にも手紙をせっせと出しましたが、なしのつぶて。やる!と言った手前、後にはひけないし、不安なスタートでした。熱意だけでやった感じです。

団体や企業は、事前に連絡をとると、ていよく断られるので、直接押しかけて、直談判しました。おかげで、伊予銀行さんは、銀行の振込み手数料を無料にしてくれました。

マスコミもめずらしいネタなので取り上げてくれたりして、やってるうちにだんだんと、松山でも何かできるんだという実感が湧いてきました。

開催前日まで、トラブルが続いて、気も張りっぱなし。他の大きな団体が同じ日に、似た様な企画をやって、それに人が流れてしまうんじゃないかとや

きもきしたり、ウォークのポイントでスタンプを押す人が足りず、前夜、知り合いの知り合いに電話をかけたりといった調子でした。ウォークが終った後、来年もやります!と連呼したら、友人から、「来年もやるって言ってるのは、あなただけよ」と言われてしまいました。

5~6年前、林さんの講演を聞いたりするだけのおとなしい活動だったのが、こんなに元気のあるイベントをやるようになったのはなぜか、とよく聞かれるのですが、JVCと関わりながら、第三世界に目をむけることで、自分探しをしてきたというか、自分の生き方を見つめられるようになって、人の噂などをふっきてきたのが原因かと思います。

今は、「しんどい」より、「楽しい」が先。動けば何かあるから、もっともっと動こうと思います。

武田節子さん(山形県)

6年前、『人間の大地』を読んで、自分の足元を見ると同時に、遠くを見なければならぬと思い、勉強会を始めました。地方にいと足元ばかり見てしまいますので。

勉強会の中から、コーヒー一杯分(500円/月)をJVCに送金する運動を始めました。会員を募集したことはないのですが、募金を集める過程で、150名の会員になったこともあります。T/Eは、手書きで書き直して、会員に配ってます。地方は情報がないので、新聞社もすぐ関心を持ってくれますし、1年に1度の定期報告会では、100名前後集まります。

テレビにも毎年出演してるし、地方紙にも10回ぐらい出てます。パネル展、エチオピア報告会、タイ・スラム奨学金とやってきました。12月には、バザーを予定しています。来年は、チャリティウォークもいいなと思ってます。山形の実情から言えば、JVCももっと田舎の方で、講演会を開いたりしてほしいと思います。

私は夫が実業家なので、JVCをやっても、「お金儲けをしているじゃないか」と言われるのがイヤで、目立たないようにしてきました。



エネルギーのことを考えて、電気を消すことも、経営者の側からは言いにくかったし、私がやってることを強要もできませんので、何も言わなかったのです。ところが最近、会社の若い人が、「割り箸を使わないように」とか「紙を無駄にしないように」とか自

主的に言うようになってきたので、私のやってきたことも無駄ではなかったなあ、と嬉しく思っています。

私自身、海外に出ていけないので、その分、JVCが活動しているんだと考えています。

谷山博史（ラオス担当 新潟県の活動を代理報告）

今日は、新潟の方が参加できなかったので、代りに話をします。

新潟国際ボランティアセンターというのが、新潟大学教授の多賀秀敏さんを中心に、今年3月に設立されました。当初は、ラオスを支援するという格好で始まり、ラオスの子供たちのためのバザーも開催しました。僕も新潟に足を運び、ラオスの話をしてきました。このバザーの時も、ラオスのために、自宅に眠っている贈答品を出してもらおうよう呼びかけたのですが、予想以上に集まり、バザーには2,000人も人が来ました。収益も200万円近くあがりました。

愛の手が着実にラオスに
— ノーサンの笑顔が輝く —

去る十一月、新潟市のグリンピースで開催された「ラオスの子供を支援する会」のバザーに、私は参加しました。このバザーは、ラオスの子供たちのために、日本から贈答品を出してもらおうよう呼びかけたのですが、予想以上に集まり、バザーには2,000人も人が来ました。収益も200万円近くあがりました。

このバザーは、ラオスの子供たちのために、日本から贈答品を出してもらおうよう呼びかけたのですが、予想以上に集まり、バザーには2,000人も人が来ました。収益も200万円近くあがりました。

掛け橋

ラオス—新潟—

第2号

1990年3月30日

発行所
新潟県民会館1-28-5
JVC新潟連絡所
TEL 025-366-2105
発行部数 1,000部

新潟国際ボランティアセンター機関誌

海外の問題に興味のある人はたくさんいるのに、どこに情報を求めたらいいのかわからなかった。そういう人たちが、今回、バザーなどをきっかけに出てきたという感じです。やっと拠点ができたといいところ。今後も、情報などが不足していて、動きたくても動けなかった人たちの拠点として、増々、活動を活発にしてくると思います。そして、ラオスだけでなく、広く海外の問題を考え、つないでゆきたいと考えています。

多賀さんからのメッセージとして、「今までの地方の国際交流は、海外の人を受け入れるばかりだったが、海外をつかむには、海外に出ていくことが大切であり、それが逆にエネルギーを注入することになる」ということと、「上から指導された国際交流ではなく、市民から始まる、下から上を動かす活動をやっていかなければ」ということを、伝えてほしいということです。実際、行動している人が実感した言葉だと思います。こちらら連携プレーで、強く長く、つないでゆきたいと思います。

安村妙さん（福岡県）

今、二児の母です。育児で大変でしょうと言われるけど、（実際、大変だけど）子持ちだとか、仕事などで自由に活動できない人にも、できることがあります。私の場合は、エチオピアからJVCのスタッフ、エシャトーとダニエルが来た時、福岡に呼んで講演会をしました。この二人を紹介したことによって、地域の中で人と人が出会い、結んでいくことができたと思います。私自身は、福岡の出身ではないので、地元になかなかはいりこめない難しさもあったのですが。

これからも第三世界の人たちの視点を取り入れて、自分の生活を作ってゆきたいし、近所の人を集めてエチオピア料理をつくったりという活動を、無理せず、楽しみながら、細々と続けてゆきたいと思います。



JVCの組織・活動は、それぞれの地域で多くの人たちの力によって支えられている。現在、東京事務所で活動している人も、総勢100人近くいると思われるが、中でも特にこの数カ月JVCに通いつめた新人ボランティアに集まってもらい、彼らが日頃どんなことを考えてJVCに来ているのかを話し合っていた。題して、

お前ら何しに来てるんだ!? 座談会

岩間 邦夫 坂根 宏治

長谷川まり 平田喜代枝

(司会) 高梨 直樹 比留間明子

なんでJVCに来たの

高梨 まず初めに、皆さんがJVCと関わり始めたきっかけと、合わせて自己紹介をお願いします。

まず、僕から。僕は早朝の牛乳配達をしながらJVCで働いています。2年前ピースボートのツアーでプノンペンにあるJVCの技術学校を見てきたのが最初です。でもその時は現場の様子よりも、JVCの名称に衝撃をうけました。「日本」「国際」「ボランティア」「センター」という何かと問題になる、意味深で怪しい四つの言葉に弱かったんですね。そんな四つの言葉がたまたま結びついた「日本国際ボランティアセンター」、これは凄いと思い、何やってる団体かも知らないのに、とにかく「これだ!!」と思いました。(笑)

長谷川 デパートに勤めています。今は週一回、火曜か木曜に来て募金の領収書を作る仕事をしています。JVCに来たきっかけは、近所のゴミ箱にJVCのカレンダーが捨ててあったのを見て、たまたまJVCの存在を知りました。(笑)

平田 去年の暮れに新聞でJVCカレンダーのことを知り、それからJVCに来ました。週二回火曜と金曜に来て、長谷川さんと同じように募金関係のお手伝いをさせていただいています。出会いがおそく、皆さんの倍の年齢なのでのろのろですが、歳を数えないことにして関わっていきたいなと思っています。

岩間 運送会社でアルバイトをしながらJVC

に来ています。主に来る時間帯は夜です。特に決まった曜日に来るわけではなく、自分のあいている時間に来ています。JVCに関わり始めたきっかけは、去年の4月、タイに行った時にJVCの訪問者として運良く難民キャンプを見せていただいたことです。あの時はご迷惑をおかけしました。

比留間 大学の3年です。犬養道子さんの『人間の大地』を読んでこういう活動に興味をもちました。新聞でJVCの記事を読んで「あ、これは安心してボランティアできる所だな」と思ってオリエンテーションに参加したのが最初です。その頃は大学の授業も多く、木曜しか来られなかったのも、木曜日の女なんて言われていました。そろそろJVCの女に昇格できるんじゃないかなと期待しているのですが…。

坂根 大学の4年です。2年の時アフリカに行き、1カ月半くらいソマリアを見学させていただきまして、それからJVCとのつき合いが始まりました。

与えられる仕事だけじゃだめなんだ

高梨 皆さんそれぞれの条件に合わせてJVCに来ているわけですが、具体的にどのような活動をしているのですか。そこでの問題点もあったら教えて下さい。長谷川さんと平田さんは募金関係のお仕事をしているのですが、ほかには。

平田 私の場合は週2回しか来れないんで、



高梨直樹



長谷川まり



平田喜代枝

時間の合間をつくって、スタッフの方が現場へ行ったときに動きやすいもんぺのようなものを作ってきて、強引にはいてもらったりしています。これからそんなお婆ちゃんのような仕事も引き受けていきたいです。

坂根 イベントの当日のお手伝いなどしていたのですが、今はタイ通信（プアン）の編集をしています。

比留間 私はアフリカに興味があったので、エチオピアチームの中でお手伝いさせてもらっています。

岩間 僕はラオスチームでやっています。今までの活動で気がついた大きな問題は、グループのミーティングをするといつでもイベントの作業の段取りを決める話し合いばかりで、何で自分たちがJVCに来てこの活動をしているのか、JVCが取り組んでいる問題について深くみんなで考えるという話し合いを全くしてこなかった。ただ与えられた仕事を漠然とやってきたということについて反省が出ています。

高梨 国内活動の特徴として、わりとどんなイベントでもそうだけど、与えられた仕事を目的にやって、終わったら散ってしまうみたいな。自分が何やっているんだかよくわからないことってあると思う。

岩間 でも最初は何でもいいから手伝いたいと思うわけでしょう。紙折るだけでも、椅子運ぶだけでも、物動かすだけでも。（笑）自分はJVCとつながっている、何か役立っていると思えるから最初はそれで満足できるんだけど、やはり問題意識を深めたいとか、自分の生き方を考えたいということから来る人がほとんどなんだから、いつまでもそれでは満足

できなくなる。

坂根 ファッションていうのかな、これやっていけばいいみたいな気持ちで、そうやって単に労働力を提供しているだけって怖いことだと思うんだよね。

岩間 それでは自分たちが何でこういう活動をしているのかという意義をよく考えてやろうとすると、じゃあ勉強会、ということになってしまうので、その辺のバランスのとり方がすごく難しい。今のラオスチームとしては、与えられたことをやるのではなくて、自分たちの関心にもとづいてやっていこうということと、具体的には現場のプロジェクトをどこまで支えられるかを追求していきたい、という考えになっています。

JVCの穴をぼくたちがふさぐ

高梨 ところで皆さんはJVCについてどう思っていますか。スタッフについて、組織について、東京事務所の雰囲気について、どんな角度からでも結構です。

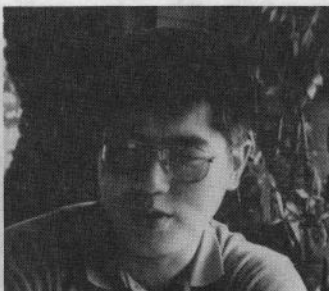
岩間 人が来たら大手を広げて暖かく迎えるという雰囲気を特に意識して作ろうとしないことで、ついて来れる奴は来い、みたいに構えていると思えるところもあって、だから必死に食いついてきたというのがあります。

比留間 でも、基本的にそれってあまりいいとは思えない。

坂根 そう。日本のボランティアって、選ばれた人、特別な人がやっている、というイメージがある。それにのめりこむのも、やめるのも決意がいるみたいな。それって結局人が限られちゃうし、ボランティアが広まっていくことを止めてると思うんだ。だから日本の常



板根 宏治



岩間 邦夫



比留間 明子

識としてボランティアが自然になるようにということが、JVCに限らず今後の日本の課題だと思う。

長谷川 私もグリーンワークの時、会社の人にスポンサーになってもらったんですが、普段JVCに来ていることを知らない人にいきなりそういう話をする、「へえ、ボランティアしているの、偉いわねえ」とみんなから言われました。ボランティアは偉い、という考え方が日本人ですごくあるんだな、と一つ勉強になりました。

比留間 オリエンテーションに来たけど入りづらいという人、私も小耳にはさむんですよ。だから私としては、オリエンテーションに来てくれた人のケアをしていけたらなあ、と思っています。スタッフの方はどうしても仕事があるからそこまでやるのが難しいと思うんですよね。

岩間 まだできて10年の団体だし、官僚的な組織じゃないし、いい意味でバラバラな所、組織としての穴ができてくる。JVCに来る人をつなぎとめる役割なんて、スタッフでなくてもボランティアでも十分できるわけだし、そういう部分をボランティアがもっと積極的に見つけにいった役割を広げていくことが、JVCが全体としてどれだけザルじゃない組織になっていけるか、というあたりだと思う。

それともう一つ、自分がJVCでやっている活動がJVCとどういうふうにつながっているのか、ボランティアのやっていることがJVCとは関係のない勝手な方向に走っていくようなことがあった時、自分たちの力だけで軌道修正できるのか、ということに不安があったりもするんですよ。

坂根 そのためにもスタッフとボランティアのコミュニケーションはもっと必要だね。それぞれのグループ同志での横のつながりももっていった方がいいと思うし、JVCの中でやっているんだから、お互いにアドバイスができるようにした方がいい。

生活の一部としてJVCに参加

高梨 ここで卒直にうかがいます。皆さんはいったい何しにJVCに来て、これからどうしようとしているんですか。

僕自身は世界に飢餓がある、虐殺がある、難民がいる、という状況の中で、その人たちを踏み台にして生きていながら、自分は何もしていない、という不安があって、そんな不安を埋め合わせに来ています。これからのことは、第三世界と関わっていくことに決めた以上、ただでは済まないという意味で、中途半端なことだけは絶対にしない、それだけは肝に銘じています。将来は現場に出ることを希望していますが、今年はカレンダーの仕事でじっくりがんばろうと思っています。

岩間 僕はJVCに来るのは、行動の仕方を学びに来ているんだと思っています。今までいろんな問題に対して自分一人で部屋の中で考えているだけで、具体的にどう行動したらいいのかわからなかった、というのがあって、現実に状況を改善していくにはどう行動すればいいのかを学ぶところがJVCだと思っています。

これからどう生きていくかというところで、社会の常識を身につける、というのはすごく大事なことじゃないかと思うこともあって、一度就職することも考えてはみたけど、JVC

のやろうとしていることは、ある意味で社会の常識を覆えそうとしているところが少なからずあると思うんだよね。要するに少数派を広めていこうとしているわけでしょう、JVCの活動は。今の社会の常識だと、そこに目を向けすぎても結局社会の方向に取り込まれてしまうし、大多数の感覚を知ろうとすると、自分が大多数の側に立ってしまう。NGOの活動にしても、社会の常識にはばまれている部分がすごく大きいと思うし、社会の常識、一般の人の感覚をどこまで崩していけるかが、日本がどれだけ変われるかの境目でもあると思う。自分の中で結論はないんだけど、とりあえず今はJVCにのめりこんでやっていきたいと思っています。やはり現場には行きたいなと思っています。

比留間 私は単純に楽しいんですよ、JVCに来てると。だから他の人がサークルやっているのと同じような感覚でJVCに来てるところがありますね。それでJVCに来ると、自分が生き生きして、一番いい状態になるのを感じるんです。だから、そうなりたいがためにJVCに来ている気がします。これからどうしていくかについては、やはりJVCの中で見失われている所、自分の目で見てこれ必要だなと思う部分をどんどんやっていきたいな、と思っています。今はエチオピアチームでがんばりたいと思います。

坂根 偽善者にはなりたくないというか、助けてあげたいという危機感だけでは自分は生きていない気がする。だから、そうではない部分でも僕は日本に留まらずにいろんな所で国際的に関わっていききたいし、そんな気持ちをどのようにプロジェクトにしてどこに必要性を見出すかまでは、まだ見えてないけど、そういう形でやっていきたいと思っています。

長谷川 自分の方向性がわからなくて考えている段階ですが、ここってわりと極端でなければいけない、定期的にずっと来なければいけないみたいな雰囲気を感じてしまうんですが、それにつかりきってしまうのではなく、働きながら、普通の生活をしながらかかわる方法はないかな、ということを考えています。

とりあえず募金の仕事はずっと続けていきたいと思っています。

平田 生活の流れの中で、自分の人生の中でこういう一部があっていいと思うんです。ボランティアをやっているという「お子さんがいないから」とか、「生活にゆとりがあるから」とか、そういうのがまだまだ一般の人の見方みたいですが、そうじゃなくて、自分の生き方の中にこれが一部として含まれていると思えば何でもない、自然なことだと思うんですよ。私としては、これからずっと長く続けていきたいです。

まずは一歩踏み出して

高梨 では最後に、これから新しくJVCに来ようと思っている人に何か一言あればお願いします。

僕はやはり粘り強く、できれば定期的に来るのがいいと思います。

坂根 ボランティアに来る人には、いろんなカラーがあっていいと思うんだ。だから本当にのめりこんで自分の生活よりも使命感をもって来る人もいていいと思うけど、そういう人たちがばかりで占められて、違うレベルでのかかわりをする人を拒むようじゃ困ると思う。だからいろんなレベルでかかわれる場をつくらしていきたいと思う。

岩間 活動に参加したいけど、どうしたらいいのかわからない、なかなか機会がつかめない、来るのが恥ずかしい、そういう人いると思うんだよね。でも来た人がなんとかスムーズに活動に参加できるような配慮も考えているので、どこかでふんぎりをつけて、とにかく足を運んで来てほしい。

平田 私、最初に電話をしたんです。「行ってもいいですか」って。そしたら「どうぞ」と言って下さったんで、怖いもの知らずで来ちゃったんです。そしたら「突然来られても仕事は…」と言われて。その時に「ここでめげちゃいけない。これは自分に対する試練だ」と思いました。第一歩を踏み出すことは勇気がいることだけど、一歩を踏み出してしまえば、学ぶことはたくさんあります。

日本の開発教育（3）

JVC執行委員

東和大学国際教育研究所教授

室 靖

5 章 学校教育外での開発教育

5-3-3 労働組合

第3世界諸国では、自主的な労働組合が未だ育っていないことが多い。多くの開発途上国では、労働運動は「反政府」と見なされ、政治的に禁止されているか、そうでなければ、政府の御用組合だけが存在を認められている。このような状況のもとで、国際自由労連に加盟している先進諸国の労働組合は、進んで途上国の自主的な労働組合の育成に当たっている¹⁾。さらにヨーロッパの労働組合の中には、自国の産業再編成の課題に積極的に取り組んでいる例もある²⁾。さらに、組合が行う労働者教育の内容には、開発教育の要素が含まれていることが多い³⁾。ところが、わが国の労働界は第3世界の労働者との連帯についても、積極的な取り組みがあまり見られないのであるが、このような状況の中で、アジアの労働者との連帯を積極的にすすめている組合の1つに、大阪東地区合同労働組合「UNION ひごろ」がある。大企業に勤める労働者と比べると遥かに劣悪な条件で働かれている零細企業の労働者たちが合同で組織したUNIONひごろは、苦しい財政事情のもとで専従者の1人を香港に常駐させており、傘下の組合員を対象にアジアの労働者が抱えている問題について知らせる活動をつづけている。UNIONひごろの情報・教育活動は、巨大な労組が今後期待されている開発教育の具体例となろう。

労働組合運動と開発教育の関係という点からいえば、学校教育に直接かかわっている教職員組合の役割が極めて大きいはずであるが、日本教職員組合（日教組）は、アジア諸国の教師たちがかかえている問題について無関心であるだけでなく、日本における開発教育についても全く興味を示していない。

- 1) 例えばドイツの労働組合は、社民党系のフリードリッヒ・エーベルト財団とともに、途上国の労働組合の強化を財政的・技術的に支援している。
- 2) 例えばオランダの労働界は、第3世界の繊維産業の興隆によって自国の工場閉鎖が進んだ結果発生する

と予想された繊維労働失業者への対策として配置転換を積極的に進めていた。

- 3) 労働組合の開発教育への係わりについては、NGLS (Geneva) が1986年に出版した「Development Education: The State of the Art (開発教育—その進展の現況: 開発教育協議会訳編) の第7章に詳しく述べられている。

5-3-4 協同組合

欧米では各種の協同組合 (cooperatives) が、第3世界の同じ種類の協同組合の育成に協力すると同時に、国内で開発教育を推進している例が多く見られる。わが国でも農業協同組合はアジア諸国の農業共同組合の指導者の養成の為の研修機関¹⁾をつくっているが、農協の組合員を対象とする開発教育は行っていない。開発協力と開発教育の両方を推進して来たのは、農業協同組合や漁業協同組合のような生産者団体ではなく、一部の生活協同組合であろう。消費者組合である生協のなかに南北問題に関心を持つものが見出されるのは、自らが扱う商品の中に第3世界の生産品が占める割合が大きいことによるものと思われる。わが国の生活協同組合のなかで開発教育を推進している代表的な例として、灘神戸生活協同組合がある。84万人近い組合員をもつ灘神戸生協は、年間2億円前後を使ってアジア諸国の消費者団体 (consumers' unions) の育成に協力する一方、国内で開発教育を行なっている点でユニークな存在である。また最近では横浜の生活クラブ生協も開発教育に関心を持つようになっている。

- 1) アジア農業協同組合振興機関 (IDACA)

5-4 マスメディア

一般市民のための開発教育という点では、テレビや新聞がきわめて重要な役割を持っている。例えば日本テレビ (NTV) が毎年夏に系列のネットワークを動員して放映する24時間テレビ番組「愛は地球を救う」は、開発教育の普及に大きな役割を演じてきた。またNHKも開発教育の普及にそのまま利用できる種類の番組を放映するようになっている¹⁾。

さらにODAが世界一になったことから全国紙や

地方紙の紙面にも南北問題や日本の開発援助に関する記事がかなり現われるようになった。しかしながら、欧米各国に比べると、わが国のマスコミ界の開発問題や青年海外協力隊の現地での活動に対する関心はまだ低く、従ってこの分野を専門とするジャーナリストの数もきわめて限られている²⁾。いずれにしても、開発教育を進めるうえでマスコミ界からの協力をもとめる必要がある。

- 1) 例えばNHKが1988年4月と7月にそれぞれ4日続けて放映した「つくられた食料危機」と題する番組シリーズは、一般の市民に開発の問題を考えさせるうえで大きな効果をあげた。ちなみにこの番組の制作者はイギリスのヨークシャーTV局である。
- 2) イギリスの場合、現在開発問題専門のジャーナリスト(いわゆる development journalist)が約130名程おり、ロンドンにある「世界開発教育センター(CWDE: Centre for world Development Education)」は毎月彼らを招いて情報交換会を開いているが、それには常に80~90名のジャーナリストが参加するといわれている。

5-5 地方自治体

社会教育としての開発教育の促進者としては、最後に地方自治体をあげなければならない。都道府県の中には、国際交流課を置いたり、行政の外郭機関として国際交流(あるいは海外交流)協会を設けたりしているところが増えている。これらの地方機関が推進する「国際交流」事業は、しばしば開発教育の内容を含む。この点で先駆的な地方自治体は神奈川県であろう¹⁾。長洲一二知事が提唱する「民際外交」の推進に力を入れて来た神奈川県国際交流課は、自らあるいは県下の市当局と共同で数年にわたり「国際交流ボランティア育成講座」を開いてきたが、この講座には常に開発教育の要素が含まれていた。また1988年3月、アジア諸国の問題に関心をもって県下の市民グループと県内外の開発協力NGOsが共同して小田原市で開催した「アジアフォーラム」の経費の大部分を支出したのも神奈川県である。日本の近代化・国際化の「窓口」の役割を担ってきた横浜港をもつ神奈川県が国際化に強い関心をもってきたことは、ある意味で必然的ともいえよう。しかし、県内に在住する多くのアジアからの人々に対して大いに理解を示していることは評価されることである。最近では東京都も主として青年層を対象とする「国際理解講座」を都下各地で開くようになって

ところ。ところが最近では首都圏から遠い地方の自治体の間でも、地域住民の国際化に積極的な関心をもつ傾向が見られる²⁾。この新しい傾向には、しばしば、地方の「国際化」と「活性化」を一体として把握する思想がうかがわれる。いわゆる「地球的に思考し、地域的に行動しよう」(Think globally, Act locally)という標語に代表される思想である。こうして現在では地方自治体が地域のNGOに協力して国際交流ないし開発教育を推進する例がみられるようになった³⁾。これは開発教育の普及という視点からだけではなく、市民グループのイニシアティブによる活動が、地方自治体を巻き込むという点で、日本社会の民主化の前進を示唆する動きとしても、望ましい動向であるといえよう。

- 1) ちなみに、1979年にUNICEF・国連大学・国連広報センターが共同してわが国で最初に開いた「開発教育シンポジウム」(横浜)は、神奈川県・横浜市・横浜YMCAの共催で行なわれた。
- 2) 例えば石川県・金沢市、鹿児島県、佐賀県など。ちなみに開発教育協議会の昨年の全国研究集会は金沢市の協力で開かれた。
- 3) 例えば、アジアの農村開発の指導者を招いて1988年11月に鹿児島で開かれた「国際地域おこしシンポジウム」は、NGOである南方圏交流センター、アジアクラブおよび鹿児島県が共同で行なった。

6章 推進のための提言

以上述べてきたように、「日本の開発教育」は国際的にみると著しく遅れている。先に3章で指摘したように、この遅れをもたらしてきた要因はきわめて複雑であり、その克服は容易でない。今後日本の開発教育を推進するために必要と考えられる一連の具体策を提言したい。

6-1 公的資金の導入について

DAC諸国政府は早くから国内で開発教育を推進しているグループを財政的に支援するために、ODA資金の一部を支出する制度を確立している。わが国政府も同様な制度を速かに導入すべきである。そのためには他のDAC諸国の援助官庁(aid agencies)に見られるように、外務省経済協力局のなかに、開発教育を所管する専門の課を設けるよう提案したい。

6-2 開発教育の指導者の育成について

日本の開発教育を推進するためにはまずその指導者を育成することが緊急の課題である。

6-2-1 大学の教職員養成過程のなかに開発教育講座を導入する。

6-2-2 将来の開発教育の指導者の外国留学を支援する。

6-3 開発教育に関する資料の充実・整備について

開発教育協議会は1988年度外務省経済協力局から財政的支援を得て、「開発教育情報センター」を新設し、開発教育に関係する文献その他の資料を集めようとしている。同センターの開設は、わが国の開発教育の普及・振興のための重要なステップであり、今後同センターがわが国の開発教育関係者にとって便利な機能を持つことを期待する。そのために民間財団も資金供与を行ない、同センターの以下のような活動を支援することが望まれる。

6-3-1 「開発教育情報センター」の一層の拡充のために国内外の関連文献を収集する。

6-3-2 国連機関や欧米諸国が出版している開発教育関係の文献の翻訳する¹⁾。

6-4 国際的な交流の推進について

日本の開発教育の推進のためには、開発教育の分野の国際的な交流を推進する必要がある。そのための具体策としては次のようなものがある。

6-4-1 国連機関や欧米の開発教育者をわが国に招いて、日本の関係者との間で情報や思想の交換を積極的に進める²⁾。

6-4-2 開発教育に関する国際会議に日本の関係者を出席させる。さらにできればその種の会議を日本で開催する。いずれの場合もそのための資金の確保が前提となる³⁾。

1) 外国で出版される文献のなかには、日本の開発教育関係者にとって有益なものが少なくない。しかし日本語に訳されない限り、わが国では殆ど読まれないからである。

2) 1989年には世界YMCA同盟が、「開発教育」の世界会議を実施しようとしている。

3) 例えば、国連のNGLS (ニューヨーク) のコーディネーター、アンガス・アーチャー氏 (Mr. Angus Archer) は、アメリカ、カナダ、日本等の開発教育者のワークショップを1990年にマニラで実施する計画を進めており、そのための財政的支援を求めている。

6-5 学校教育内の開発教育の促進策について

わが国の開発教育は特に学校教育の面で遅れてい

る。この現状を改善する具体策として次の提言をおこないたい。

6-5-1 個々の教師 (ないし学校) による開発教育カリキュラムや教材の開発などの具体例の普及を促進する¹⁾。

6-5-2 先駆的な開発教育を実践している現職の教師に、他の先進諸国の開発教育の実情を調査する機会を提供する。

1) 開発教育協議会が毎年開催する全国研究集会はそのためのよい機会である。

6-6 校外教育、市民運動としての開発教育の推進策について

学校教育の外でいろいろな性格のNGOグループが展開している開発教育を推進する方策としては、次のようなものが考えられる。

6-6-1 それぞれ独自の視点から開発教育に係わっている各種のNGOs (労働団体や生活協同組合などを含む) の間での思想や情報の交流を奨励する。

6-6-2 アジア諸国を対象にオルタナティブ・ツアーやワークキャンプを実施する青少年団体、その他の市民グループの経験のフィード・バックを行なう。

6-7 マスメディア界との連携について

広く市民の間に開発教育を普及させるうえで、テレビ・ラジオ、および新聞などのマスメディアが持っている力はきわめて大きい。したがって、わが国の開発教育を振興するためにはマス・メディア関係者からの協力が不可欠である。

6-7-1 NHK教育テレビ (学校放送番組) に、「開発教育」の講座を加える。

6-7-2 開発問題・南北問題・援助問題に特に関心を持っているジャーナリストが専門のクラブを組織し、定期的に会合するよう呼びかけ、必要な助成の途を考える。

この論文は笹川平和財団にて実施された昭和63年度事業「日本の開発教育」の研究資料として作成・提出されたものです。



第8回会員総会

6月10日 東京都婦人情報センター

新しい展開を迎えて

ーベトナム、ミャンマー、サラワク

JVC第8回総会が6月10日(日)、東京都婦人情報センターにおいて行われた。

当日、午前中は「地域の中に世界がある」と題し、山形、新潟、大阪、愛媛、福岡各地からの参加者の活動報告を受けて、参加者全員で話し合いをした。

特に、今回、愛媛でチャリティワークを企画・運営した土居さんの元気の良い苦労話に触発され、各々どんな協力ができるかなど、話が盛り上がり、時間が足りずに総会開始がずれこんだ。

午後の総会では、元エチオピア代表、現在2児の母親で、今回、福岡から参加した安村妙さんが司会を務めた。決算・予算報告のあと、各担当から活動報告と計画が話された。新たな取組みとしてベトナム、ミャンマー、サラワクでのプロジェクトが提案され承認された。(第8回会員総会の詳細は、年次報告書をご参照下さい。)

・規約変更の提案

会員の種別の中から、賛助会員の項目を以下の理由で削除することが承認された。

1. 賛助会員の会費は「金額自由」であるため、実質的には募金による支援者である。
2. 賛助会員へも、希望があれば、機関誌を送付している。そこで、年に1度くらい会費をお願いすると、「金額自由なのだから、催促される筋合いのものではない」とお叱りを受けることが時々ある。
3. パソコンで事務処理を行っているものの、正会員と比べて、会員係の負担が大きい。

今回の決定を踏まえ、賛助会員の方には募金者や

機関誌購読者になって下さるよう、ご協力をお願い致します。なお、総会の議事録は年次報告書に同封いたします。

＜総会前夜祭＞

6月9日(土)、午後12時から、JATAN(熱帯林行動ネットワーク)と協力して、「サラワクの森から」と題し、文京区民センターでシンポジウムを行った。この日は、サラワクで熱帯林に住む先住民たちと7年間、共に生活をしてきたスイス人・ブルーノ・マンサーを迎えて、先住民たちの生きた声と生活を知ることができた。

また、JVCからは、5月初旬にサラワクを訪問してきた林達雄、岩崎美佐子、司会役の岩崎駿介が参加した。JVCの会員も出席し、この後、午後6時からJVC東京事務所で開かれた懇談会へ揃って、移動した。

懇談会では、40人近く集まり、自己紹介をしたのち思い思いに杯を重ね、料理を食べながら雑談をした。特に「会員だったがJVCへ来たことがなくて、今日は思いきって来た。スタッフや他の会員の人と話せて、JVCをぐっと身近に感じられるようになりました。」という方が何人もいて、主催者としては嬉しい限りだった。元JVCのスタッフだった人たちが、子供を連れてきており、あっちこっちで子供と遊ぶ姿もみられ、楽しく充実した時をもつことができた。まだJVCに来たことのない方は、来年、是非、前夜祭(予定)、総会にご参加ください。お待ちしております。



自己紹介する参加者

グリーンウォーク in 松山

土居 陸子さん

エチオピア救援に寄付

5月20日、愛媛県松山市で行われたチャリティウォークの募金18万円を、主催者の土居陸子さんがJVC東京事務所を訪れ、林達雄事務局長に手渡した。

東京で5年前に始まり、今年、松山でも同日開催されたこのウォークに、人口1千万を越える東京で、800人しか集まらなかったのに、人口30万の松山で、初回にして200人の参加者は、賞賛に値する。

アジア、アフリカに関心を持つ人は多い。しかし、行動に移す人はあまりに少ない中で、一人でもやると決心し、実行委員会を組織し、単身、伊予銀行の

★ ★ ★

選挙後のビルマ

変わらぬ難民の状況

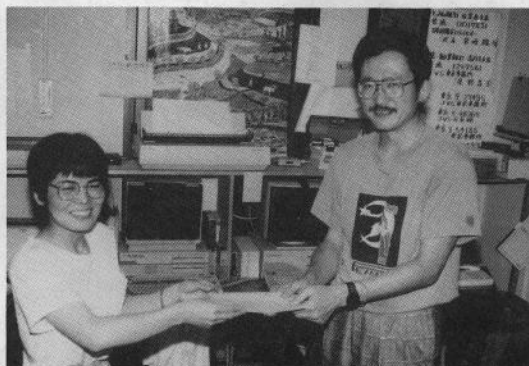
5月22日までに送金頂いた合計15万円を6月6日受け取りました。ビルマ会議の場で使い道について話し合われ、このお金は、新しくタイに逃れてきたモン族の難民の7月分の米代に当てられることになりました。ご協力、ありがとうございました。

5月27日、30年ぶりの自由選挙が、ビルマ国内であらゆる規制のもとに行われ、アウン・サン・スーチー女史の率いる国民民主連盟(NLD)が議席の80%を獲得して圧勝した事実が、今後、少数民族難民の問題解決に少しでもはやく作用するように願うばかりです。

そこに至るまでには憲法の設定と政権移譲がすみやかになされること、そして新しい政権が少数民族との問題に真剣に取り組むことが必要です。しかし、実際の道のりはまだ遠く、タイでは6月7日、政府が、タイ国内のビルマ人不法滞在者の本国送還を発表し、その日のうちに2,000人がつかまったことが発表されました。また、最近、カレン州内の戦闘地域に入った人の話によると、国内避難民も増えており、マラリアなど、健康状態もかなり悪い村が多く、医薬品の国内での緊急援助を始める必要があるということです。

ひき続きビルマ少数民族難民緊急援助にご支援をお願いします。 大石道子 バンコク事務所

頭取に会いにいき、交渉の末、募金の振込手数料を無料にしてもらったりと行動した土居さんは、「考えるだけではなく、動くことによって面白くなる」と言う。彼女の熱意と、今回裏方をひき受けてくれた方、ウォークに参加した方々の思いをエチオピアに届けます。



募金を手渡す土居さん

募金の項目が変わります

1980年より設けていた「インドシナ難民救援募金」の項は、長期にわたって活動を続けるにつれ特定の団体から資金援助を受けられるようになったため、削除します。(カオイダンはUNHCRとSV(オランダの援助団体)から現地で、パナニコムは国際移住機構から寄付を受けています。)

また、今まで「タイ・スラム募金」「スラムの子供奨学金・基金」「タイ農村募金」の3本立てとなっていたが、寄付金指定欄の都合上、「タイ募金」として一本にさせていただきます。指定する場合は、「スラム」「奨学金」「農村」のいずれかを○で囲んでください。

新たに、「ベトナム募金」と「環境募金」の項目が増えました。ご支援をよろしくお願いします。

- A. アフリカ難民救援募金
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金
- C. カンボジア募金
- D. タイ募金(奨学金, スラム, 農村)
- E. ラオス募金
- F. ベトナム募金
- G. 定住難民募金
- H. 環境募金
- I. JVC運営経費募金
- J. 無指定募金

JVCプロジェクト

1990年6月25日現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2、4土曜日 午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介（代表） 林 達雄（事務局長） 熊岡路矢、星野昌子、前川昌代、鍋田三芳、山口誠史、岩崎美佐子、富安光子、今泉 恵、鈴木由子、富安庸太郎、柴田久寿子、高梨直樹
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内での渉外、事業計画、資金調達等を行う。 今月、県国際交流協会内に、ビルマ難民救援委員会を設置。ビルマ難民の写真展と平行して、募金キャンペーンを展開中。その他、第4回ポートウォークよこはまと、エチオピア支援バザーの企画をすすめている。		清水俊弘
日本国内	●定住難民プロジェクト 5月27日、ブレ企画から関わってきた、ケアハウスさくら苑でのイベントの集大成として、「Y² Joint Party（ワイワイ・ジョイント・パーティー）」を開催した。さくら苑のお年寄り・職員約150名に定住者・ボランティアなどのお客さん約100名で、インドシナの料理や伝統舞踊、音楽を楽しんだ。 6月17日、神奈川で行なわれている海の祭典「サーブ'90」の藤沢会場にて、ラオス民族舞踊団が、パフォーマンスを行った。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金、ケアハウスさくら苑	小野豪大、他約60人
エチオピア (東ゴジャム州) ビチェナ	●ビチェナ緊急救援活動 東ゴジャム州、青ナイル峡谷沿いの低地斜面に住む2万5,000人の干ばつ被災者に対して ①フード・フォー・ワークによる食糧配給、泉の保護、環境保全、支道建設、②保健衛生教育と診療所への支援を行うことが決定した。 —配給に必要な食糧3,000トンのうち、957トンカナダ政府から調達し、現地に輸送した。 —食糧配給のための登録を終え、テーブル台地の縁から低地までの道作り（歩くための道）を、現在行っている。 —現在までに、870万円の支援金が集まっている。感謝！ —その後の調査により、同地域は85年以来雨不足が続くJVCスタッフがマーシャのコレブ地区で見てきたどの状況よりも深刻化していることがわかった。 ●総合的復興促進（マーシャ村） 内戦のため昨年11月より中断している。再開が待たれる。	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動、モラロジーMIRC、東京グリーン・ウォーク、西本願寺、チャリティ・サイクル、Tree for lifeの会、中部善意銀行、毎日新聞社会文化事業団JVCカレンダーメサイアコンサート エチオピア救援バザー	山田 盛、江原浩昭、江原広美、田尻真由美、寿賀一仁、中野周二、イエットベルク、ソロモン、バレット、ダニエル、エシヤット、トーマス、シュクール、アリ、アビエ

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲトー郡) ハルバ・キャンプ (ゲトー郡)	●農業による自立促進 雨期に入り、今年は順調に雨が降っている。農民は畑に出て耕作に専念しており、平年以上の収穫が期待される。主に作付けしているのは、とうもろこし、たまねぎ、ごま、豆類などである。一方、パパイヤ、バナナなどの果樹が収穫期を迎えている。これらの果樹については、引き続きJVCから苗木を、新しい農場を中心に配っている。	UNHCR, 仏国土をつくろう会 メサイアコンサート	磯田厚子, シアッド, ムハボ, アオキ, ヒレ, ラシッド
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	●農業による自立促進 5月中旬から一時帰国していた農業技術者の船川夫妻が、1カ月ぶりに現場に戻り、雨期の耕作、播種に忙しい農民の指導に当たっている。また、従来JVCのプロジェクトでは対象としていなかった、あくまで遊牧を生活の基本としたいと希望する難民に対し、やぎやひつじを貸し出して、成長したら返してもらう「アニマルバンク」を新たに始めるために準備を開始した。	UNHCR, R.I. Japan	船川秀夫, シュクリ・モハメッド
カンボジア カンボット県 プノンベン カンダール県	●サンタビエップ技術学校/ワークショップ 国土を復興するため物資の国内輸送を担う公共輸送機関の役割を重視し、部品・設備の供給、自動車整備士の養成を初期の目標として、1986年にこの事業を開始した。運輸省輸送公社が現地の実施機関となり、JVCは自動車整備の教官を派遣した。 輸送公社は現在539台のトラックを持ち、内103台が日本製。従来日本製トラックのスペアパーツは全面的にJVCが調達してきたが、現地政府も最近ようやく自分たちで購入できるようになった。 当初より訓練を受けてきたのは、ワークショップに配属された輸送公社の職員が中心だが、ほかに孤児などにJVCが奨学金を出し、研修生として受け入れている。現在生徒・スタッフの合計は42名。 訓練では、実習を兼ねたトラックの修理と並行して自動車工学などの知識をくり返し教えている。第三期は今年9月に始まるので、それに向けてカリキュラムの整備、カンボジア語の教材・教科書の準備を急いでいる。また、今までの教室は騒音が激しいため、4月より新たに教室棟の建設を開始し、この6月、基礎工事がほぼ完了した。 ●RINE (ライン) プログラム【母子保健活動】 プノンベン郡では①母子保健センターと巡回母子保健活動 ②発育グラフの記入の仕方の講習会 ③郡病院でのお粥・豆乳サービス ④子供の栄養状態の悪い村を選んだ各家庭の生活改善 ⑤再度の小児発達評価調査などを援助する。また、助産婦技術向上訓練の成果を見届ける。 プノンベン郡の16の村で巡回母子保健活動を実施し、とりわけ栄養状態の悪いと思われる村を選んで小児発達評価などを援助する。また、助産婦技術向上訓練の成果を見届ける。 今年11月にプノンベン郡、クササイカンダール郡で働いている医師、助産婦ら計4人をインドへ研修に送る。 ●井戸掘り・給水 1990年からこの活動はOXFAM・LWS・JVCと農業省水利局との共同事業となった。7県とプノンベン市に、今年90本の井戸が掘られる計画である。JVCはこのうち、15本の井戸掘りを援助する。どこに掘るかを定めるために、県の水利局と交渉を始める。	創価学会青年平和会議, モラロジ・MIRC, 立正佼成会, 日産労連, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡寺族青年会, 毎日新聞大阪社会事業団, 明るい社会づくり運動神奈川県協議会, 浄土宗東京教区青年会, 国際保健協力市民の会(SHARE), 四日市商業高校, JVCカレンダー, 全日本仏教青年会, カリタス・ジャパン, 「第1回カンボジア・クラシックコンサート」, 真如苑, 「武蔵野市100周年キャンペーン募金」, 生協ひろしま, 銀座ライオンズクラブ, メサイアコンサート	古西 勇, 馬 清, 杉江美子, 本橋 栄 「現地の実施・調整機関と主な担当者」 (運輸省) 国際局 メアス・サメット 自動車輸送公社 タック・カン ワークショップ アム・ディエン ゲット・ソーン カム・ボラ (保健省 母子保健局) アン・サルン医師 カンダール県 保健委員会 ニム・ニェム医師 プノンベン郡 保健事務所 サム・サルン医師 母子保健活動 トゥイ・カッ マッ・サモン (農業省 水利局) テ・アヴ・キム 井戸掘り活動 ホック・セタ ソー・サリン

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
カンボジア バットバン県 バンテイ・ミエンチェイ県	●内戦による国内避難民への緊急援助 戦闘の激化によって、バットバン県、バンテイ・ミエンチェイ県に7万人近い避難民が流出し、政府カンボジア赤十字とNGOが協力して救援活動をすすめている。JVCは飲み水を確保するための水瓶を主に援助する。		
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンボジアを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整 ・ビルマ少数民族難民緊急援助。 ・井戸の修理はカモンが車の事故に会い、一時中断。	全国社会福祉協議会 電力総連	ポンビモン・チャイブーン、 カモン・ミンムアン、 大石道子、主婦ボランテ ィア15名
カオイタン （カンボジア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 6月11日新学期が始まる。生徒数604名。パンタットからの生徒が引き続き学んでいる。鍛冶屋と運転の新コース準備が進んでいる。	UNHCR, SV (Stichting Vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム、 スティ・ネップラコン、 井本勝幸、井本美奈
バナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	●日本語学校 6月1日に文化オリエンテーションを行った。日本料理、ひらがなゲーム、日本映画の上映、そして、「のど自慢大会」を行い、各々の国の歌を披露しあった。5月28日から6月6日、COERR MINER CENTER（ベトナム難民の孤児＜未成年者＞を収容している施設でセクションの中にある、子供たちに言語教育＜主に英語＞オリエンテーションを行っている。）のオリエンテーションに協力し、JVCより映写機・ビデオを貸し出し、子供たちのために日本映画を上映した。	IOM	竹村雅義、熊沢ゆり、 チャワリット・ドゥワンボム、 岡村達司、蘭牟田浩美
地域開発 (CD) （バンコク市内の スラム地区） （ブリラム県の M村）	●奨学金プロジェクト 南部タイへ行き、奨学生の学校、家庭訪問を行った。チュンボン県、パティユとターセでは、13の学校に給食用豆乳製造機（1台3,000バーツ）を贈呈し、これをもって昨年来の台風被害の緊急援助を終える。スラタニー県、ナコンシタマラート県、クラビ県では、43人に2年目の奨学金援助をし、対象者が小学校を卒業するまで続けることを決めた。バンコクでは約200人の奨学生の学校、家庭訪問をほとんど終え、年次報告書を作成している。今月末から発送予定。 ●農村開発 水牛銀行の必要な農家を調べたところ21件あった。主婦達が生協を作る資金を得るためバザーを行う。	モラロジーMIRC, Tree for life の会、雄勝町町 内寺院会、国際 ソロブチミスト 駿河、JOFIC、 からし種、JVC カレンダー メサイアコンサ ート	コメン・スンスマン、 スングレー・ロースワン、 サムルアイ・ジョンヨ ークラン、池島千津子、 トンカム・サムルンラム
ラオス ヴィエンチャン 県 ボーリー・カムサイ 県 カンムアン県	●生活改善普及員養成プロジェクト 第2回養成コースが4月24日から4カ月間の予定で始まった。このコースは農業改善のための基礎知識を保健衛生等の改善と関連させて教える。2月にはこのコースの準備として、トレーニング講師の東北タイ・スタディー・ツアーを行ったが、本コース期間中には、スタディー・ツアーを受け入れてくれたタイのNGOのATAから農村開発員を招き、講師として参加してもらった。 第1回養成コースの卒業生は、生活改善普及員として出身地域で母子保健を中心とした普及活動を展開している。また地方の普及活動の拠点として計画した三つの母子センターの建設が終了し、各センターでの普及員によるトレーニングも順調にすすんでいる。	UNDP, UNIFEM, 庭野平和財団、 新潟国際ボラン ティアセンター、 日産労連、ギャ ラリーイカット、 聖ヨゼフ老人ホ ーム、老人ホ ーム天寿荘、難 民と地球の緑を考 える会、グルー プ・カンガルー、 メサイアコンサ ート、JOCV、	谷山博史、北詰秋乃、 原田恵津子 JVCカレンダー

JVCの活動とその目的に御理解を

▶ **JVCとは**—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっか
けに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動
を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形が
できました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日
本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等
によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、
宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境
にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶ **JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、
JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の
活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができま
す。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には
機関誌の購読料が含まれています。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)

▶ **機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

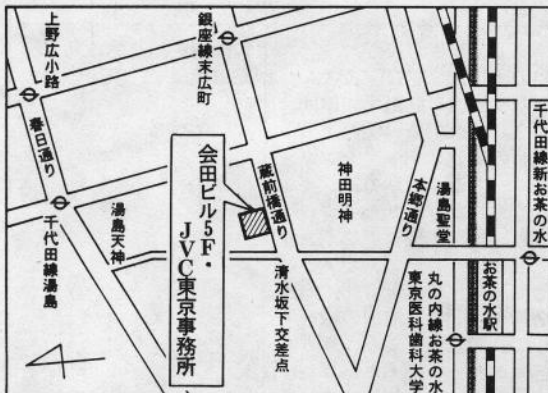
- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい)

▶ **みなさまの募金を支えるJVCの活動**—救援活動をより充
実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の
20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民救済募金** (6月小計 378,916円) アフリ
カの難民・飢餓民への救済プロジェクトに使われます。
 - B. **グリーン・フォー・アフリカ募金** (6月小計 210,990円)
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
 - C. **インドシナ難民救済募金** (6月小計 1,500円) タイ国
内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
 - D. **カンボジア募金** (6月小計 205,670円) カンボ
ジア国内の復興のために使われます。
 - E. **タイ・スラム募金** (6月小計 507,500円) バンコ
ク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及
び図書活動に使われます。
 - F. **スラムの子供奨学金・基金** (6月小計 71,500円) バンコ
ク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
 - G. **タイ農村募金** (6月小計 3,500円) タイの
農村開発のために使われます。
 - H. **定住難民募金** (6月小計 1,500円) 定住難
民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
 - I. **JVC運営経費募金** (6月小計 9,500円) 現場を
支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
 - J. **ラオス募金** (6月小計 51,500円) ラオス
の婦人の生活向上プログラムのために使われます。
 - K. **無指定募金** (6月小計 719,253円)
- ▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
加入者名—JVC東京事務所

編集後記

▶ **組織も生きもの。**いつかは衰え、消滅する。もし可能な
限り活力を保とうとすれば、人材の新陳代謝を続けつつ、
規則やシステムによって人が縛られないことであるう。
自由、自発、自律の3「自」が大事でしょう。(鶴田)
▶ **およそ組織という言葉には似つかわしくない型破りな人**
たちに囲まれて、緊張した時間の流れの中をさまよって
いる。しかし着実な歩みを進めていきたい。(高梨)
▶ **組織なんて皮をむいてくとも何も残らない。**しかし、人が
集まってくると顔ができてくる。自己を生かし、のびのび
してこそ組織も元気がいい。組織はそこにいる人たちの心
を表わしている。(柴田)



犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (6月小計 192名 1,074,260円)
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設け
ました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使
われます。

Trial & Errorは再生紙を使用しています

1990年7月20日発行(毎月20日発行)

編集人 柴田くす子、高梨直樹、鶴田三芳、柴田久史

発行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC) 東京事務所
〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
☎03(834)2388 FAX: 03(835)0519
Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セン
タービル9F (財)神奈川国際交流協会内
☎045(671)7082

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。